

美を紡ぐ日本美術の名品

日本美術の名品 一雪舟、永徳から光琳、北斎まで一

国立博物館（東京・上野） 2019.05.03～06.02

展覧会は、文化庁、宮内庁、読売新聞社が官民連携で推進する「紡ぐプロジェクト」の一環として、文化財や皇室ゆかりの名品などの「保存・修理・公開」を一体的に行う試みとして開催される。今回は展覧会の魅力を高め、より多くの優品を観覧してもらおうと関係機関が調整し内容を当初の20件から「41件」に拡充して開催される。

久隅守景（くすみもりかげ）（生没年不詳）《納涼図
屏風》国宝 江戸時代 17世紀



画伯は、狩野派を脱して田園風景画に新たな画境を見出し、本作品は暮れゆくあたりの風景にひたりながら、おぼろな月の光の下で、夕顔棚で農夫の男女と子供が夕涼みをする光景が描かれている。がっしりと無骨の男の腕は太く硬い線で、女の柔らかく滑らかな体は、細い柔らかい線で白い肌をくっきりと際立たせて、細かい描き分がされている。また子供は、片肌を脱いで親に寄り添って、3人の顔は繊細な筆で適格に表情をとらえ、和やかな家族の一時を描いている。

黒田清輝 《舞妓》 重要文化財 1893年 油彩/カンヴァス



画伯がフランスから帰国して京都で最初に仕上げた作品で、「日本の近代洋画を代表するもの」とされている。

この作品では、京都・賀茂川の豊かな流れを背景にお付きの小娘（おちよぼ）に、振り向きざまのポーズで答える窓辺に腰をかけている舞妓の日常のひとこまを即興の妙で見事に捉えられている。描かれている色彩はいうまでもなく筆勢に新鮮な感覚が生き生きとして、浅瀬の川の流れに面した室内は、外交源らしい明るい光に満ちて、舞妓が少女の面影を残しながらの可憐な姿の美しさを湛えている。

古都・京都での新鮮な驚きである「祇園の舞妓」との出会いが、留学成果としての印象派的表現と一体となり澁刺で清新な作品となっている。